室町時代の正月行事の記録

かつて広野地区の内神川流域には、内上荘（うちがみのしょう）と呼ばれる荘園（有力者の領地）がありました。そこには現地の管理などを担当する地頭（じとう）という役職がおかれていましたが、おそらく何かの紛争をきっかけとして、内上荘の東半分（東方（ひがしかた））と西半分（西方（にしかた））で担当の地頭が分けられていました。そのうち東半分の地頭は、現在「人形寺」として有名な宝鏡寺（京都市上京区）が担当し、その関係で室町時代の内上荘東方に関する古文書が残されました。そのうち市史第3巻古代・中世資料の247頁に掲載した「内上荘東方地頭職（じとうしき）年貢算用状」には、今から600年以上前の正月行事に関する記載があります。

中内神感神社の参道

この資料は地頭が得る年貢とそこから差し引かれる経費の明細です。その中に必要経費として「一石三斗正月一日お宮の祭礼、お頭のおない迄、六斗修法酒（ろくとしゅうほうのさけ）、正月の祝い迄」とあります。この記載からは地域で行われた正月の行事に地頭が経費を負担したことがわかり、その総額は一石九斗（玄米約 290kg）で、現在の玄米卸売り価格に換算すると8万円以上となります。

まず元日には神社で神事があり、一連の行事として「お頭」が行われたことがわかります（「おない」とあるのは祈祷を意味する「おこない」のことでしょう）。

現在上内神と中内神には感神社があります。江戸時代までは牛頭天王（ごずてんのう）社と呼ばれていましたが、位置からみてこの両社はおそらく室町時代の内上荘の、それぞれ西方と東方の「お宮」の流れをひくものと考えられます。両社では現在もオトウが引き継がれています（市史第9巻民俗編参照）。続く「修法」は密教の祈祷のことでお寺の行事です。江戸時代までは中内神に中照寺という真言宗のお寺がありましたが、ここで行われた新年の祈祷に地頭からお酒が奉納されたのでしょう。

これらが室町時代の内上荘東方で行われた、いわば公式の正月行事だったようです。たった3行ほどの古文書の記述ですが、「泣く子も黙る」ともいわれた地頭も協賛した、地域の厳粛な正月行事の様子がほうふつとさせられる貴重な記録です。

総務課市史編さん担当